

**被災で居場所をなくす外国人。
平時からの生活サポートが
いざという時にも生きる。**

豊中には現在、中国、ベトナム、フィリピンなどアジアを中心に多くの外国人が住んでいます。企業で研修生として働く人の多くは家賃の安い木造アパートに住みます。多忙な日本人の夫と暮らす外国人の妻は、言葉の問題もあってなかなか人間関係ができません。DV(ドメスティック・バイオレンス)に悩む人もいます。経済や言葉のハンディをもつ人が被災すると、それまで何とかしのいでいた問題もあらわになり、生活の立て直しはとても困難です。阪神・淡路大震災でも家と仕事を失い、遠方への転居を余儀なくされた人が少なくありませんでした。それは貴重なコミュニティ、居場所を失うことでもあります。私たちは緊急時の支援を視野に入れた「気軽に声をかけ合える関係づくり」をおこなっていますが、さまざまなハンディを背負った外国人の方が安心して暮らせる長期的ケアや支援が必要です。

国際交流の会とよなか(TIFA)代表 葛西英紗さん

**家族ができた今、他人事ではない。
今、できることを考えたい。**

地震の怖さを知りながら特に備えもしていませんでしたが、今は地震が起きた時に子どもを守れるのかという大きな不安があります。また、非常時に夫婦の関係が試されるので、ふだんからお互いの気持ちを話し合っておきたいと思います。結婚前は自分中心、今は家族中心の生活ですが、地域との関わり方も考えていかなければと痛感しています。

「すてっぶジャーナル」市民スタッフ 北川朗子さん

実家のある九州でも大きな地震がありました。自分たちに被害がなかったのが他人事でした。今回、豊中に活断層があることや想定される被害の大きさを知って怖くなりました。意識するかどうかでキャッチできる情報の量や内容が違ふこともわかりました。小さい子どもを抱えての避難には不安がたくさんあります。実演、体験型の防災講座があれば参加したいです。

「すてっぶジャーナル」市民スタッフ 吉永恵子さん

揺れが収まった時、被災した人々は声をかけ合い、生きていることを喜び合いました。けれど時間が経つにつれて、先行きへの不安やいらだちが生まれてきます。「みんなの震災」から「それぞれの震災」へと移り変わってゆく時、私たちが向き合い、乗り越えなければならぬものは何なのでしょうか。さまざまな立場にいる豊中在住の女性7人が阪神・淡路大震災の経験や今の思いを語ってくれました。

時間とともに、 「みんなの震災」から 「それぞれの震災」へ

**震災をきっかけに高まった防災意識。
今後は地域にネットワークをもつ
女性の視点を防災計画に。**

阪神・淡路大震災をきっかけに校区自主防災が結成され、地域諸団体がそれぞれの役割を担っています。私たち女性防災クラブも消防班として毎年訓練を行っています。いざという時、行政がすぐにあらゆることに対応できるわけではありません。大地震が起きた時、安全確保や安否確認、避難所の運営など地域が担わなければならないことはたくさんあります。混乱を最小限に抑えるために、ふだんから「地域でできることは地域で」という意識を住民全体で共有しておくことが大切です。また、防災には各家庭の様子や地域の情報が欠かせません。PTA活動や近所づきあいなどの女性のもつネットワークはとても貴重ですが、防災計画や訓練の立案・運営に積極的に関わる女性がまだまだ少ないのが残念です。表に立つのは男性にという意識は女性の側から見直していきたいものです。

野畑女性防火クラブ代表 村上深雪さん

**誰もが何かを失いながら立ち直ってきた。
前に進むには、どこかで自分で区切りをつけること。**

自宅の屋根が落ち、風呂の基礎が落ちた瓦で壊れました。見た目かなりの損壊でしたが、市の検査ではなぜか「無傷」という判定で、再検査をお願いしてもダメでした。一方で、とことんねばって判定を変えてもらった人たちもいました。「なぜ? どうして?」という気持ちになりましたが、町会長や民生委員として「避難生活を送っている方々への支援活動をおこなうのが自分に与えられた役目だ」と気持ちに区切りをつけました。避難所に毎日通い、子どもたちと遊び、親御さんたちと対話を重ねました。互いに励まし合い、苦しいなかでも楽しい毎日でした。誰もが傷つき、何かを失いながらも、ほとんどの人が人生の目標に向かっていきます。立ち直るためには「孤立しない・させない」という視点の支援が必要ではないでしょうか。

独居老人の会・会長 池田澄子さん

**情報が入らないことが何より不安だった。
いざという時にはまず声をかけてほしい。**

大きな揺れに驚き、すぐにラジオをつけました。地震の大きさは繰り返し伝えられましたが、視覚障がいのある私には自宅周辺の様子がわからず、2日間は家から出ることもできませんでした。ふだんは一人で買い物にも行きますが、どんな障害物があるかわからない道を歩くのはとても怖いのです。不安な気持ちでいる時、近所の人が「大丈夫ですか」と声をかけてくれたり、「屋根が壊れていますよ」と教えてくれたりしたのがありがたかったです。地域の活動に参加したくても、障がいがあると助けていただくことばかり。お願いするばかりではと遠慮が先に立ち、ご近所づきあいも難しいものがあります。震災後に要援護者として登録しましたが、いざ地震が起きたらすぐ来てもらえるのかどうか。不安は尽きませんが、このシステムがうまく稼働するようにと願っています。

主婦 中塚良子さん

**半壊の家からパートに通い続けた1年
生活が落ち着くまで3年かかった。**

夫と3人の子ども、夫の母と暮らしていた築35年の借家は半壊。けれども家主が補修してくれず、玄関の戸が閉まらないまま、雨漏りにも悩みながら1年近く暮らしました。「出ていってほしい」と言われましたが、子どものことやお金の問題があり、簡単に動けなかったのです。パート先の会社は「落ち着くまで来なくてもいいですよ」と言ってくれましたが、解雇が心配で一週間後から仕事に出ました。避難所からの通勤や子どもの風邪、洗濯など大変なこともいろいろありましたが、保育園で子どもを預かってもらい、ずいぶん助かりました。その後、復興住宅に移りましたが、生活が落ち着くのに3年ほどかかりました。

パート勤務 田辺順子さん

震災後を生きていくための 5カ条

1. 真面目さ、申し訳なさもほどほどに
2. 依存せず、でも気持ちは柔軟に
3. 人や地域とのつながりを意識する
4. 自分にとって必要な備えをしておく
5. 損得やエゴに振り回されない心の準備を

**復興過程で生まれる格差。
けれど人は人間関係のなかで
立ち直ってゆく**

阪神・淡路大震災が起きた時、私は神戸市長田区に住んでいました。私自身も被災したのですが、当時は兵庫県立女性センターで相談業務をしていたのでとにかく職場へ向かい、一週間後から相談を受け始めました。

時間の経過とともに相談内容は変わってきました。震災直後は水や食糧のことや仕事の不安など具体的な問題が多かったのですが、2ヶ月3ヶ月と経つうちに精神的なしんどさを訴える人が増えていったのです。同時に、被害の度合いや助けてくれる人間関係の有無などによって残酷なほど格差があらわになっていきました。たとえば、半壊か全壊かという判定や親戚や会社からの支援によって立ち直りに差が出てきます。また、逆に「支援はできる限り受けたい」と考える人もいれば、「自分でできることは自分で」と考える人もいます。自分自身の経験も含めて、被災者という立場は同じでも価値観や人生観によって立ち直り方は違うことをつくづく感じました。ただ、あまり真面目に自立を思いつめるのも、逆に行政や人に依存しすぎるのも、最終的にはその人自身が生きづらくなってしまいうように思います。格差があると言いましたが、最終的には経済的な豊かさよりも、ほどよい距離感と信頼関係のある人間関係によって人は立ち直っていくようです。

誰もがいつ、どこで被災するかわかりません。私は自分の経験から重要な書類はすべてまとめ、口座番号などはメモをしてあります。もしまた被災するようなことがあれば、損得やエゴに出来るだけ振り回されず、周りの人と助け合える自分でありたいと考えています。

すてっぶ・相談担当主任
川畑真理子
(元・兵庫県立女性センター 女性問題カウンセラー)